
鈍感な君に。

桜羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈍感な君に。

【コード】

N4365H

【作者名】

桜羽

【あらすじ】

甘く酸っぱい感じの、女の子の恋心。「好き」って言えない。気づいてほしいんだよ？

「ねえ、好きな人いる？」

それは私が唐突に投げた言葉。

君は少し目を見開いて

「ききたい？」

って

意地悪な瞳で言った。

「…んー。ただ気になっただけ…」

素直になれない、私。

「いるよー」

おちゃらけた感じでサラッと言われた一言。

それと同時に痛み出した心。

いるんだ…

そうだよね。

中学生だし…

君は女子とも仲いいし。

いろんな女の子が頭をグルグルする。

誰だろう？

気になる。

だけど…知りたくないつて気もする。

変な、気持ち。

「お前は？」

いきなりの質問に
ビクンっと体が跳ねた。

「んー。いるよ…」

「君だよ」

なんて言えればいいのにね。

勇気がなくて

友達のことを崩したくなくて…。

いろんな言い訳を自分自身にして
ただ逃げてるだけなのはわかってるんだ。

だけど

どう頑張ってみても
勇気なんて出てきてくれなくて…。

「へー…誰?とかね」

笑ってそう言う君に
心臓が波打った。

言えればいいのに。

「怖い」

「友達のままでもいい」

「どうせ私なんか」

そんならない気持ちがいつまでも私の中をグルグルする。

「好き」

ちゃんと心にはその感情が大切にしまっている。

だけど

その心から出てきてはくれない。

きつとこの気持ちは

声になんてならない。

「…可愛い人」

君には、よく『可愛い』って言ってる。

気づいて。

気づいて。

「えー…あいつ?」

君が指さす方向には
クラスで一番格好いい男の子。

「ちがうー…背が私より10センチ高いよ」

君は私より背が10センチ高い。

気づいて。

気づいて。

「…わっかんないー」

鈍感なのか？

ここまで言ったら

普通わかるでしょ…？

「同じクラス」

「ふーん…」

考え始めた君はクラスを見渡す。

ドキン、ドキン、

心臓が更に早く動き出す。

「だめ。わかんね。教えて？」

本気でわからない顔をしていた君。

「なっ…鈍感？」

思わず口からでた一言。

「ちょ…それ失礼!!」

ちよつと怒ったような顔をされた。

だけど

それに反抗するように私は続けた。

「ツ鈍感…!!わかるでしょう?!普通」

わかるじゃん。

わかってよ。

言えないの。

言いたいのに。

「…なっ！！もう知らねー！！」

君は余計に

眉間にシワをよせた。

「やばい…怒っちゃった…」

心ではちゃんと理解できてる。

だけどなぜか

口が勝手に動く。

「鈍感っ！！バカッ」

しんっ……

と

時間が止まったかのように、沈黙になった。

「はあー…なんなの？」

下を向いたまま呟かれた一言は、とても疲れたような声だった。

その声に心が痛んだ。

私が君を困らせた。

私が君を怒らせた。

私が…素直じゃないから…

「……………」

なにも言葉に出来なかった。

なんで私は

「ごめんね」すら

言えないの？

なんで困らせることしかできないんだろっ？

「…、」

君は気まずいのか、下を向いたまま顔を上げない。

困らせることしかできないの？

「好き」

声にすることができないの。

「…もじい」

そう言って廊下に向かって歩き出した、君。

「…だからっ！…」

その背中に向かって私は叫んだ。

その声に反応してピタッと止まった、君。

「好きだって言ってるのっ…!!」

鈍感な君に、

最初で最後の「好き」を贈るよ。

すべてがリセットされてもかまわない。

最初で最後。

すべてが壊れてしまってもかまわない。

だから

どうか届いて。

私の気持ち。

「…ばっ…かかよ!」

「…え…?」

背中を向けたまま君は自分の頭をくしゃくしゃってして、言った。

心臓が全力疾走したあのようにバクバクと鳴る。

しばらくの沈黙。

時間が止まったかのようなようだ。

やっぱり…

困らせることしかできないんだ…。

無意識のうちに涙が臉を濡らす。

だから
我慢してたのに。

「そう言えばいいだろ！！最初から…」

長い沈黙を破ったのは私が大好きな低い声。

「…鈍感だよ…どうせ。だから、言ってくんなきゃわかんねーの…
!!!」

そう言ってから私の方を向いた君は、真っ赤だった。

「っ…だって…私っ…勇気でなくてッ…ごめ、」

必死に涙をこらえながら心の中に溜まっていた言葉を声にする。

そんな私を君は真っ直ぐに見つめている。

「…泣くな。お前だって鈍感だろ…俺、結構アピールしてたのによ

…」

そう言いながら

私の瞼に溜まった涙を優しく拭ってくれた。

「…気づかないもん」

全然、気づかなかった。

「…気づいてほしかったんだよ」

…ああ

そっか…

君も私と同じだったんだね。

気づけなくて、ごめんね…。

「もっかい…好きって言って？」

私の瞳を真っ直ぐに見つめた君の瞳。

あーあ。

さっきのが
最初で最後だったのに。

そんな瞳で見られたら

断れないじゃんか…。

「……………すぎ…」

小さな小さな消えそうな声で呟いた。

君は

「…ばあか」

そう言って

私の頬にキスを落とした。

鈍感な君に

ちゃんと伝えよう。

私がどれだけ君の事

「好き」

ってことを。

だから

鈍感な私にも

ちゃんと伝えてね？

君の「好き」を。

(後書き)

こころいじ恋も

あるんでしょつかね。

*

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4365h/>

鈍感な君に。

2010年11月5日13時46分発行